東方命燃録

文章力皆無マン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いろいろあって都在住の主人公。果たして、数々の試練を乗り越えて幸せになることはできるのでしょうか。

週一更新を目指します。

追記：題名を変更しました。

東方転生譚→東方命燃録

目次

古代都市編
第0話 …… 1
第1話 …… 3
閑話　楽しい剣術指南 …… 7
第2話 …… 10
第3話 …… 13
第4話 …… 16
第5話 …… 20
閑話 …… 23
第6話 …… 27

古代都市編
第０話

大学からの帰宅途中、鐘がなり遮断機が降り始めた踏切を転んで擦りむいた痛みから上手く歩けずに渡りきれていない子供を見かけた俺は、真っ先に走り出して子供を線路の外に突き飛ばした。

気がつくと俺は、真っ暗な空間にいた。

死ぬと天国行きか地獄行きかを決める為に閻魔様に裁かれるって聞いてたんだけどな。

「その閻魔様が私です。」

急に後ろから声が聞こえた。正直めっちゃビビった。ビビったのを誤魔化しつつ後ろに振り向くと、とても閻魔様には見えない幼女がいた。

「え？」

「いやだから、私がその閻魔様です。」

そう言われても信じようがないと思うんだ。

「信じてないですね？やっぱり地獄行きにしますよ？」

「すいません信じますから許して下さい！地獄行きだけは嫌です!!」

今そこにいた幼女の説得力がすごすぎて幼女に見えなかった。幼女の閻魔様…？これってつまりは合法ロリ…？

「今失礼な事を考えましたね？」

「すいません。考えました。冗談ですから許して下さい！」

やばい、まじ怖い。

そういえばさっきやっぱり地獄行きにしますよって言ってたけど、やっぱりってどういうことだ？

「それなら今から説明します。簡単に言うと、あなたは私たち側のミスで死んでしまいました。」

「ん？それならさっき確かに子供のことを助けたはずなんですけど…」

「それがミスなのです。本来、あの子供は踏切にいるはずではなかった。ですが私たちのミスによりその子供の運命を変えてしまった。その影響があなたにまで波及したことがあなたを死に追いやってしまったのです。」
「そこでそのお詫びとして、私たちが干渉することの無い完全な別世界に転生し、第二の人生を歩んで頂けたらと思っているのです。」
「なるほど。両親も既に他界してしまったし、未練もない。何より最後に人を助けて死ねましたのでその提案は喜んで受けます。」
　やば、本心とはいえちょっとかっこいい事言った気がする。
「分かりました。それではこれからあなたを転生させるにあたって、説明があります。まず、記憶は断片的ですが引き継がれること。そして、そこはあなたの元いた世界とは全く違う場所である可能性が高いことです。なぜなら世界は星の数ほどあり、そこからランダムで転生先が選ばれるからです。」
「ごめんなさい。後者に関しては我々の力が及ばないことなのでどうしようも出来ないのです。」
「いやいや全然気にしませんよ。代わりと言ってもなんですが、最後に言わせてください。」
「？なんでしょう？」
「なんていうか…短い間でしたがお世話になりました。」
「…ふふっ。そんなに凄いことはしてませんよ。それと、私から一つ言わせて貰います。」
「いってらっしゃい」
　そんなこと言われたのは何年振りだろうか。予想外の言葉に自然と笑みが零れた。
「行ってきます。」
　そう言うと、たちまち俺は光に包まれた。

第1話

目が覚めるとそこは広く、豪華な装飾が散りばめられた部屋のベットの上だった。
体を上手く動かすことが出来ない。なんだこれ。
「あうあうあ」
…は？なんか変な声が出たぞ。もしかして…
「うあ《俺》、あうあぁ《赤ちゃん》？」
うわぁ、まじかよ。
しばらくすると母親と思われる女性が部屋に入ってきた。
「どうしたの～？恋太郎くん。抱っこかな？」
どうやら俺は不安そうな顔をしていたらしい。いけないいけない。
女性は俺を抱きかかえ揺すり始めた。そのまま歩いて部屋を出てリビングらしき部屋に着くと、これまた父親らしき男性がソファに座ってなにかの端末をいじっていた。
「恋太郎は良い子だなぁ～。よく寝てミルクも飲むし、可愛いなぁ～。」
「もう…あなたも可愛がるだけじゃなくてもう少し面倒を見てくださいね？」
「ごめんごめん。ほら、おいで恋太郎～。」
……
そんなこんなで自分の名前や状況を知ることができた。
俺の名前は綿月恋太郎で、綿月家はかなりの名家であること。
簡単に言うと貴族のようなものだ。
ただ、精神年齢が２０歳を過ぎているのに赤ちゃんとして生活するのは拷問と言ってもよかったと思う。それでも、俺は両親に愛されていることを身をもって体感した。

それから数年後…
おっす！俺綿月恋太郎！１５歳！今年で中学生活も終わりかぁ！

いやぁ～ここまで長かった。
うん…本当に。実際、体が思うように動かないことがどれだけ辛いか分かった。体が動かせるようになると、防衛隊陸軍総司令官の父上に頼み込んで剣術を教わった。父上の訓練は死ぬほど辛かったけど、体を自由に動かせていることが何より楽しかった。
それから2人の妹が誕生した。
これがもう死ぬほど可愛いわ。多分目に入れても痛くない。名前は豊姫と依姫。もう犯罪的な可愛さだと思う。もうシスコンになろうかな…
なんて考えながら歩いていると
「あら恋太郎。随分機嫌が良さそうね。」
後ろから声をかけられた。普通にびっくりした。後ろから声をかけられるのは苦手なんだよなぁ。
「あぁ輝夜。なんてったって今日は修学旅行だしな！ウキウキするぜ。」
輝夜は俺の幼馴染。フルネームは蓬莱山輝夜。俺と同じく名家のお嬢様で、同じ貴族学校に通っている。
「恋太郎は本当に子供ねぇ。テンション上がりすぎよ。」
「本当は輝夜だって楽しみで夜も眠れなかった癖に。」
「なっ…そ、そんなことないわよ!!」
そう、輝夜はとにかく素直じゃない。所謂ツンデレってやつだと思う。
「もっと素直になればいいのに…輝夜は可愛いんだからその方が絶対モテるぜ？」
「う、うるさいわね！私はあんたと違って周りの人間に無駄な愛想を振りまかないのよ！」
「そう怒るなよ。せっかくの修学旅行、楽しもうぜ？」
「そうね!!」
輝夜の歩き方がめっちゃルンルンしていた。めっちゃ可愛かった。

修学旅行1日目つつがなく終わった。
そして2日目、俺たちは都市外の森でハイキングをしていた。
周囲を防衛隊員の人たちが歩く中、俺たちは安全にハイキングを楽しんでいたはずだった。
おかしい。どうしてこうなった。さっきまで一緒に歩いていた防衛隊員の人たちはたった1体の妖怪によって地に倒れ伏し、生徒も半数は意識が無くなっていた。
そう。説明していなかったがこの世界には人を喰らう生物、つまり妖怪がいるのだ。
妖怪がフラフラとした足取りで捻れるようにこちらに振り向く。
「ッ！」
その瞬間、心臓を鷲掴みされたかのような恐怖を感じた。
俺以外の生徒も様々な反応を見せていたが、全員が等しく恐怖を味わい、動けなくなった者もいた。
この状況、できるだけ生存者を増やすには誰かが囮になるしかない。
「みんな、俺が時間を稼いでるいる間に都市に戻って助けを読んでこい!!ここから都市までの距離はそんなにないはずだ！みんな、できるな？」
「そ、そんな！あなたを1人で置いていけないわ！」
輝夜が叫んだ。
「安心しろよ輝夜、それにみんな。俺は死ぬつもりなんてないからな。」
「約束よ。絶対に死ぬんじゃないわよ！」
「おう！それじゃあまた後でな！」
俺はみんなが都市に向かって走っていったのを確認すると妖怪の方に向き直った。
「貴様1人でこのワシを食い止めようとは…随分とまぁ、度胸があるじゃないか。気に入った。ここはせいぜい遊ばせてもらおうではないか。」
「時間を稼ぐのが目的だけどよ、俺は死ぬつもりはないぜ？」

「ほう…そこまで言うのなら、せいぜいこの私を楽しませて見せよ!!」

閑話　楽しい剣術指南

綿月家の剣術指南は過酷な基礎トレーニングから始まる。
綿月邸の庭内をひたすら走る走り込み、通常のものの１０倍相当の模擬刀を用いた素振り、都市の化学力の賜物であるサイズ的に有り得ない重さのトレーニング機器を使った筋力トレーニングｅｔｃ……
そして、実戦訓練である父上とのエンドレス模擬刀打ち合い。
父上は7歳の小学生になんて過酷な内容の修行じみた事を指示していたのか…
尤も、やりたいと言ったのは自分であるから懸命に取り組んではいた。
始めた頃はどの項目もまともにこなせなくて凹んだっけな。
なんて考えている内に残るは実戦訓練のみになった。
父上と正面で向き合う。相変わらず凄い迫力だ。
洗練された動作で一礼するとすぐに打ち合いが始まった。
鍛え上げられた足から繰り出す神速…のつもりの踏み込みから最小の動作で父上に斬りかかるが、難なく躱される。
よし、ここまで想定通り。振り切った刀をすぐさま持ち替え、逆の方向に斬り上げる。今度は正面から受け止められた。必然、鍔迫り合いの形になる。
「いい技だな。避ける余裕がなかったぞ。」
やったー、褒められた（棒）
めっちゃにこにこしてるじゃん父上。どういうことなんだ？本当に人間？
「ありがとうございます、父上。」
そう言って、一旦距離を取る。
次は父上から踏み込んできた。
いや、父上はその場から消えたと言ってもいいだろう。
「!?クッ…」
なんとか一太刀目は受け止めることができた。今ほとんど瞬間移動したぞ父上。やっぱり人間じゃないわ。

そこからすぐさま父上の連撃が続く。なんとか受け止め、いなし、時には躱すが防戦一方で反撃ができる隙間がない。隙が全く無い。
このままこれが2時間続いた。そう、2時間。普通に考えて有り得ねーだろ…
俺は既に限界が近付いており、肩で息をしていた。それに対し父上はまだ余裕そうなんだけど…
正直一生父上には勝てる気がしない。それでも父上と指南が始まったばかりの頃した約束がある。いつか父上を超える、と。だから諦められない。
残ったなけなしの力を使ってなんとか再度父上から距離を取る事に成功。
次の一撃で勝負を決めるしかない。
父上が構える。恐らくもう一度消える踏み込みをしてくるだろう。
大きく息を吸い込み、ゆっくり吐く。所謂深呼吸だ。意識を極限まで研ぎ澄まし、父上を捉えようと目を見開く。
……来た!!!
父上の一太刀目を紙一重で避ける。ほとんど無い隙を狙って一撃を入れるための、最小の動作で最速の一閃。
そんな…カウンターにカウンターを重ねて来るなんてインチキだ。
父上の模擬刀が迫る。
ぁ…むり…
模擬刀は俺に接触する前に寸での所でピタッと止まったが、あまりの疲労で意識が飛びそうだ。
体から力が抜ける。一瞬、父上が目を見開いてたような…
そんなことを考える暇もなく、俺は意識を手放した。

意識が戻る。
「恋太郎、またあなた派手にやられたわね。」
えーりん先生が言う。えーりん先生には幼い頃から面倒を見て貰っている。どちらかと言えば本職は研究者か輝夜の付き人だと思

うけど。
　ちなみに先生っていうのは何となく付けているだけだ。
「今回は一撃くらい入れられると思ったんですけどね…」
　これは本当だ。最後の一撃はあと少しだったと思う。
「今回に限っては私も見ていたけど、あと０．０３秒振り切りが速ければ入った一撃だったかもしれないわね。ま、頑張りなさいな。負けたままじゃ姫も振り向いてくれないと思うわよ？」
「いやいやいやいや、あいつとはそんな関係じゃ無いですよ!!」
「あら、そう？」
　えーりん先生渾身のニヤニヤだ。
　断じて俺と輝夜はそんな関係ではない…はず
　それはそうとして、俺が父上に勝つ日は来るのだろうか

第2話

クラスメイト全員がこの場から遠ざかるのを見届け、ゆっくりと息を吐く。所謂深呼吸。集中したい時は決まって深呼吸をする。相手は妖怪、父上のように手加減などしてくれない。敗北すれば死ぬ。

いつものように得物はないが、無手でも時間稼ぎ程度にはなるだろう。

腰を落とし、ゆっくりと構えを取った。

「まだ成人もしていない人間がようやるではないか。どうやら覚悟は決まったようだな…。こちらからいかせて貰おうぞ!!」

人とは絶対的に異なった体躯をした妖怪が一直線に突っ込んでくる。速い…が、対応できる速さだ。落ち着いて躱すと、すぐさま2発目が迫ってきた。鋭く尖った腕を伸ばしてきた。反応することはできたが躱すことが出来なかった。槍のような腕が右肩に突き刺さり、勢いのまま吹き飛ばされ何度か地面でバウンドする。

「なんだ?·貴様大口を叩いておいてその程度か?·」

「まぁ焦るなよ。勝負はこれからだ。」

「ふん…手負いの子犬風情がよく言うではないか。」

もう一度力に任せて突っ込んできた。紙一重で躱すと先程と同じように腕を伸ばしてきた。が、これは先程の1発で見切った。この技は妖怪なだけあって人にはできない動きから繰り出される。だが、両腕を攻撃に使ったことで大きな隙が生じるはずだ。それを狙って渾身の力を込めた正拳突きをお見舞いし、間髪入れずに回し蹴りをしてから一旦距離を取る。

正直、見切ることが出来ても攻撃が加えられない。妖怪だけあって外皮が異様に硬いせいだ。だからと言って諦めてしまえばこちらの勝ち目は本当に無くなってしまう。自分に言い聞かせるように虚勢を張る。

「お前の程度にも底が見えそうだぜ?」

「この私に攻撃を当てるとはな…しかし、当たっても効果がなければ意味は無いぞ?」

「それでも見切るのは簡単だ。避け続けて時間を稼いでやるよ」
「やれるものならな。」
今度は俺の方から相手に踏み込む。狙うは眼球だ。外皮がどれだけ硬くても眼球なら攻撃が通るはず。１度左に重心を逸らしてフェイントを入れてから一気に右腕を眼球に向かって突き出す。奴の腕が右脇腹を掠め、肉が削がれるがそれでも止まらない。ここで止まれば攻撃するチャンスは二度と来ないだろう。
残り数センチ。あと少しだ。歯を食いしばる。
「惜しかったな」
奴の首が９０度以上折れ曲がり、俺の渾身の一撃は空を切る。
「なっ…」
腕と頭を捕まれ、身動きが取れない。そのまま圧倒的な力で右腕を折られ、蹴り飛ばされた。大木にぶつかり、なんとか止まることができた。目が霞み、貫かれた肩から流れる血が止まらない。
大量の出血からか、目の前が霞む。微かにこちらにゆっくりと歩いてくる奴の姿が見える。奴の姿が近付く度に、心は絶望と恐怖に征服されてゆく。自分の意志とは関係なく、体は生きることを諦め始める。
ふざけるな。輝夜と約束したじゃないか。
無常にも奴は俺の目の前まで迫っていた。
ふと、自分が1度死んだことを思い出す。あの時はもう、自分の愛した家族は周りにはいなくて、お世辞にも順風満帆とは言えなかった。しかし、今はどうだ?俺にはいる。守るべき人が、大切な家族が。
「絶対に死ぬんじゃないわよ!」
頭の中に輝夜の声が響く。あぁ、そうか。俺は死にたくないんだ。
ならしよう。精一杯の抵抗を。
体に力が漲る。霞んでいたはずの視界が澄み渡り、景色はクリアに映った。
体が燃えるように熱い。それなのに、かつて無いほどの力の高まりを感じた。
満身創痍の体を起こす。相手を倒して生き残ることだけ考えて。

漲る力に任せ、かつてないほどの速さで相手に迫る。そのまま連続で正拳突きを繰り出し、続けて渾身の踵落としをする。
先程とはまるで立場が逆転したかのような一方的な展開になる。
吹き飛ばされた相手に追いつき空中に打ち上げ、ボレーシュートの要領で再度蹴り飛ばす。樹木を何本も薙ぎ倒しながら、数十本先の大木でようやく止まった。この時点で妖怪は修復不可能な程の傷を負っていて、ほとんど意識がなかった。首を掴んで持ち上げる。奴の視線がこちらへ向き、微かに口が開いた。
「貴様…本当に…人間なのか……？」
「あぁ。間違いなく俺は人間だ。」
正拳突きが胴体を貫通し、妖怪は息絶えた。
俺は無言で妖怪に背を向けて歩くと、近くにあった木にもたれ掛かり倒れるように座り込んだ。どうやら、俺はここまでようだ。もう、体のどの部分にも力が入らない。先程まで遠ざかっていたように感じていた死はすぐそこまで迫ってきていた。瞼が刻一刻と閉じていく。意識が無くなる瞬間、微かに輝夜と大勢の人の姿が見えた。

第3話

夢を見ていた。
上下左右も何も無い空間を漂っている。そこには何も無くて、それでも少しだけ、温かさがあったと思う。

ゆっくりと瞼を開いた。室内の照明が酷く眩しい。
なんだか右足が重い。なんとか体を起こして見ると、そこにはよく見知った姿があった。こちらとしては寝ていたので時間の経過は分からないが、どうしてか随分久しぶりの再会のように思えた。
「いけない！寝ちゃってたわ」
唐突に目を覚ました輝夜と目が合う。
その瞬間、堰を切ったように目から涙が溢れ出た。涙を流しながらただいま、と言おうとするがうまく話すことができない。涙を流しながら口をパクパクと動かす俺を見て、輝夜は涙を流しながらも微笑んでいた。
輝夜は俺を無言で抱きしめるとついにはわんわんと声を上げて泣き出し、それにつられて俺の涙も一層勢いを増した。
それから数分後、病室から大声が聞こえ、何事かと永琳先生と数人の医者達が部屋に駆けつけた。水分を補給してから簡単な検査をし、病室で永琳先生から話を聞くこととなった。
「まず一言言わせてもらうわ。おかえりなさい。」
「はい、ただいま戻りました。」
「本当に、無事とは言えなくても生きて戻ってきてくれて嬉しいわ。なんせあなた、3ヶ月も意識が戻らなかったのよ。」
「そんな…3ヶ月も寝ていたなんて…」
「おまけに体もボロボロの傷だらけ。輝夜様が心配するのも頷けるわ。あの娘はあなたを心配して学校にも行かずに看病していたのよ。あとでお礼を言うことね。」
輝夜、やっぱり心配してくれていたんだな…

「わかりました。それと、あの妖怪との戦闘について説明していただきたいのですがよろしいでしょうか？」
「私も今丁度そのことについて話そうと思っていたところよ。まずはあの妖怪について説明することがあるわ。」
「あの妖怪はここ一帯でも特に危険指定されていた個体で、妖怪には珍しい知性があったわ。それこそ、防衛隊員の一個小隊を半壊させる程には。そして、あなたはそれを倒した。分かるわね？」
「はい。それよりも、奴と戦っている途中に体が燃えるように熱くなってからかつてないほど力を発揮することができたのですが、それはどういったことでしょうか？」
「貴方はその時無意識に能力を使ったのよ。あの時、あなたの体の中では爆発的に霊力が増加していたようね。貴方はもともとの霊力はあまり大きなものではなかったはず。尤も、戦闘力は綿月様のおかげもあって相当なものではあったのだけど。」
「そしてこれが本題。その膨大な霊力はどこから来たのか、ね。あの時、貴方は体が燃えるように熱かったと言ったわね？それは本当に体が燃えていたからなのよ。正確に言うと、あなたの生命力、即ち命が燃焼し霊力が爆発的に増加したのよ。さしずめ、命を燃やす程度の能力と言ったところね。」
「この考察結果が得られるまでに2ヶ月の期間を要したわ。そして、それでわかったことが1つあるわ。それは貴方の能力には行使するにあたって絶対的な限界点があるということよ。私たち人間の寿命は長いとはいえ、必然的に限りがあるわけね。それを燃焼させるとなれば絶対に寿命が減るという事ね。」
「命を燃やす…か。今回の能力行使で短縮された俺の寿命ってどれくらいなんでしょえか？」
「予測も混じっているけど、大方3年弱は短縮されたわ。平均年齢的に考えれば多大な影響では無いかもしれないけど、この能力については未だわかっていないことの方が多いわ」
「だから、あなたの家族の方々と話し合って、ある取り決めをすることにしたわ。」

「と言うと？」
「能力の使用禁止よ。」

第４話

「能力の使用禁止…か。」
　そう呟きながら一旦病室から出ると、入口近くの壁にもたれ掛かっている輝夜がいた。
　どうやら永琳先生との話が終わるまで待っていてくれたようだ。
「ねぇ、恋太郎」
「ん？」
「私、怖かったわ。突然みんなが死んで、恋太郎も目を覚まさなくて。」
　そう言って輝夜はまた涙を流す。輝夜を2度も泣かせてしまった。こんなに人を心配させるなんて、自分が情けない。
「ごめんな」
「違う、恋太郎のせいなんかじゃないの。私は自分が無力で何もできなかったのが悔しかった。」
　輝夜は顔を歪めて押し殺した声で涙を流す。
「そんなことない。輝夜が俺を助けてくれたんだ。だから、もう泣くな。」
　そう言って泣き続ける輝夜を抱きしめる。
「私を置いていなくならない？」
「もちろん。ずっと傍にいる。」
「約束できる？」
「あぁ、約束する。絶対に輝夜を1人になんてしない。」
　それっきり輝夜と俺は一言も交わさず、しばらくの間そのままの状態でいた。

　しばらくすると輝夜も落ち着きを取り戻し、いつも通り話すことができるようになっていた。
「今日は素直な輝夜だったな。」
「黙りなさい。あんなに心配したんだからしょうがないわ。」
「すまんすまん」

「あ、そうだ。早速さっきの約束を行使させてもらう事にするわ」
「なんなりと～」
「再来週の週末は私に付き合いなさい。」
「望むところだな」

亡くなったクラスメイト達の葬儀に出席したり、病院への通院をしている内に2週間が経った。
「今日は久しぶりに買い物に行くわよ！」
「よ！待ってました！」
「なんか棒読み気味で腹が立つわ…まぁいいわ、それじゃあ行くわよ。」
向かったのは都市内最大級の複合商業施設。ファッションや雑貨、日用品からアミューズメントサービス等も充実している。
「似合うかしら？」
「ドヤ顔すんな。なまじ可愛いから様になってるのが腹立つぞ。」
ファッションのことはよく分からないが、輝夜のことだから服装には特に気を使っているのだろう。
「♪～」
これかな、こっちがいいかな？と上機嫌そうに服を手に取り比べる輝夜を見て不覚にも可愛いと思ってしまう。
「ちょっと試着室に行ってくるわ。近くのベンチで待っててちょうだい。」
「了解。」
見たところ買い物カゴには大量の服が入っていた。あれ全部買うのかな…？ここ結構なハイブランドショップだぞ…
なんて考えていると、
「似合う？」
「なっ…」
ビキニ姿の輝夜がいた。程よく丸みを帯びた女性的なボディラインが脳を雷の如く刺激する。

「なによ～、顔赤くしちゃって。」
　無理ないだろ。いくらなんでも不意打ちすぎるわ。
「に、似合ってると思うぞ…」
「そう？なら良かったわ。」
「お、おう…」

　その後も雑貨屋さんやゲームセンターを周り、へとへとになりながらも事件後初の息抜きということでとても普通に楽しむことができた。
「恋太郎にしてはなかなか楽しませてくれたじゃない」
「さいですか…でも、俺も楽しかったよ。今日はありがとな、輝夜。」
「そっ、そうね！どういたしまして～って、何言わせてるのよ！」
「まぁまぁ。素直で可愛かったぞ」
「ほんっっっとにうるさいわね!!でも…ちょこっとだけ嬉しかったわ。」
「ん、最後なんて言った？」
　バッチリ聞こえてたけど。めっちゃ可愛いわ。
「なんでもないわ！よ!!」
「えぇ～、気になるなそれ」
「絶対に教えないんだから！」
　あぁ、生きてて良かった。本当に。
　なんて考えながら歩いていると、自分の家の前に着いた。輝夜の家まではもう少しある。
「送っていこうか？」
「大丈夫よ、これくらい。」
「まぁ、そう言うなって。俺が送りたいんだ。ダメか？」
「あなた、卑怯ね…でも、ありがとね。その…まぁ…嬉しいわ。」
　そう言って顔を赤くしながら微笑む輝夜。天使かな？
「じゃ、行くか。」
　そう言って2人並んで歩き出す。

……

しばらくの沈黙が続いたあと、先に口を割ったのは俺だった。

「なぁ、輝夜」

「なにかしら？」

「見舞い、毎日来てくれてたみたいだな。お礼、遅れて悪かったけど、本当に嬉しかった。」

「な、なんでそれを知ってるの!?」

「えーりん先生に教えてもらった。」

「どうやら永琳にはキッツ～いお仕置が必要みたいね。」

怖…輝夜から負のオーラが溢れ出てる。

「怖いわ。可憐な女の子がしちゃいけない表情してるぞ。」

「あらあら、そんなことないわよ？」

急に笑顔になった。逆に怖ぇ。

気付けば輝夜の家のすぐ近くまで来ていて、少し寂しくなった。

「そろそろ着くな。」

「えぇ、そうね。」

「今日は楽しかったよ。また2人でどこかに行こう。」

「こちらこそ、楽しかったわ。そうね！」

帰り際に少し微笑んだ輝夜は小さく手を振ると、静かに帰っていった。

その表情はどこか儚げで、少しだけ寂しそうだった。

もっと、強くならないとな。これ以上輝夜に辛い思いはさせたくない。

第5話

俺はショッピングの翌日、父上に相談していた。
「父上。俺はもっともっと強くなりたい。あの時は無手だったとはいえみんなを守りきることが出来なかった。」
「恋太郎。父さんも軍人だからな。お前の気持ちは痛いほど分かる。幸いお前の武の才能は同世代だけでなく、この都市全体でも秀でていると言えるだろう。だが、強大な力には常に責任がついてまわることになる。覚悟ができていないならこの願いは受けてやることができない。」
「もちろんだ、父上。いや、父さん。覚悟はあの時決めたさ。」
「恋太郎。お前ならそう言ってくれるだろうと思っていたぞ!!それでこそ俺の息子だな。」
父さんに頭を撫でられる。いい歳して少し恥ずかしいが、俺の覚悟を認めてくれたことがとても嬉しかった。
「ありがとうございます!!父上!」
「そこでだな、お前がさらなる強さを求めると踏んで既に準備はしてあるんだ。」
「剣術は引き続きこの俺が教えよう。そして霊力の操作と能力の制御は八意に頼んでおいた。」
「父上、今後ともよろしくお願いします!!」
「おうとも。あとは恋太郎専用の得物をしつらえるのみだな。」
「そんな…いいの!?」
おっと、興奮のあまりいつもの口調が崩れてしまった。
「あぁ。綿月家に伝わる刀を受け渡そうとも思ったが、お前は自分に完璧に合った得物を使って欲しくてな。ちなみにこれまた八意に頼んである。彼女の技術力ならお前の要望に答えられるはずだ。」
やばい、超うれしい。
「ありがとうございます!!父上!!」

場所は変わって俺は永琳先生の研究所兼家に来ていた。
「これから恋太郎には私が霊力を扱う基礎と能力の制御を教えます。」
「望むところです。」
「それと、貴方の得物の製造の依頼を受けているわ。」
「待ってました!!!」
「それじゃあ、あなたの要望を詳しく話して頂戴。」
～説明中～
「なるほどね。わかったわ。完成品は1ヶ月以内に渡せるようにするわ。」
うぉぉぉぉぉぉ!!!!
「えーりん先生！ありがとうございます!!よ、世界一の技術者！」
「はいはい、ありがとうね。でもあなた、女性を褒めるのは下手ね。」
「ぐっ…」
「それじゃ、茶番はこの辺にして訓練を始めるわよ。」
「よろしくお願いします!!」

「まずは霊力を体外に放出する訓練をするわ。でも、ただただ霊力を外に向かって放出するだけでは霊力は霧散してしまうの。したがって霊力を放出したら1箇所に集中させることが大切ね。」
「ほうほう…」
霊力を放出、1箇所に集中……できなくね？
「…？」
「どうしました？」
「なんでもないわ。それと、最初はできなくても仕方ないわ。まずは放出することのみ練習してみなさいな。」
「分かりやした～…ってこれ、なんだかひどく疲れますね。」
「そりゃあね。体力を使ったら疲労が溜まるように霊力を行使すれば疲れるのは自然なことよ。」
「なるほど。」
「霊力を放出する時は霊力が体から滲み出すイメージをするといい

わ。」
「了解！」
滲み出るようなイメージをしながら霊力が放出されるよう力を込める。
霊力は放出されてる？でもなんだか違和感を感じる。
「やっぱり、ね。おそらく恋太郎自身の特異体質か何かに阻害されて霊力が体外に放出されていないわ。」
「それはどういう意味ですか？」
「そうね…体の周りにある結界のような何かに阻まれて霧散さずにその中に留まっているわ。でも、許容量を超えた霊力は少しずつ漏れ出ているようにも見えるわ。それから漏れ出た霊力はすぐに霧散しているようね。」
「なるほど！分かりません！」
「まぁ、いいわ。これに関しては多分解析しても意味が無いわ。おそらく能力の一部でしょうし。とりあえず、あなたは霊力を操作することのできる範囲が極端に狭いのよ。」
「けっこう曖昧なんですね。」
「ええ。だからまずは能力の定義を確定させるための実験をするわ。」
実験？俺、もしかしてモルモットにでもされんのか…？
「あぁ、実験って言ってもあなたのその結界の範囲を調べるための簡単なものよ。」
よ、良かったぁ…

それから、小一時間程の実験で特異体質のあらましも大方分かった。
能力の範囲は自分を中心にして半径約束２ｍ。その範囲内であれば自分以外の物に霊力を流したり身体強化等することもできるようだ。
「さて、これから恋太郎には身体と物に対する強化について学んでもらうわ。」

閑話

「そこはもっと思い切った踏み込みをした方が強力な一撃になるぞ」
「はい！兄上！」
「今のところは半歩下がって無駄なく動く！」
「はい！兄上！」
……
「２人とも、頑張ってね～」
私の日課は毎日兄上から剣術を受けている依姫を見て応援しつつ寛ぐこと。
私も剣術は少し齧ったけど、どうやら才能が無いみたい。代わりに頭を使うことは得意で兄上にも褒められるんだから！えっへん。
こうして寛ぎながら２人を眺めていると、いつも眠くなってうとうとしてしまう。どうやら１０分ほど寝ていたみたい。２人とも疲れてるのかな？
そう考えた私は家に戻って調理場へと歩いた。
調理場にはたくさんのお菓子や食料品が並んでいて、入るだけでお腹が減ってしまう。
「ダメダメ！我慢我慢。」
無意識にチョコレートに向かって伸びていたた右腕を抑えると、２人と自分のために見繕った携帯食料やお菓子を持って庭に戻る。
「お兄様！依姫！差し入れよ～！」
稽古中の２人はピタッと動きを止めてそれぞれ別の反応をする！
「まじ！サンキュー豊姫！」
「さ、差し入れ…お菓子…ハッ！兄上、私はまだまだ立ち会いたいです！」
「依姫は本当に真面目ねぇ。」
「お堅いばかりだと怖がられちゃうぜ？」
「兄上も姉上も茶化さないでください!!」
「まあまあ。運動したらエネルギー補給は必須だろ？」
「ふん。それならいいです。」

「ふふふ。」
なんて、微笑ましい輪の中に入っているのが今の私の幸せ。
いつまでもこのまま楽しく暮らせたらなって思ってけど、ある日、お兄様が大変な怪我を負ったらしく家に帰って来ることが出来ないことがあった。
その時はとても怖かった。多分、依姫は歳が低い分私よりも怖かったと思う。
それでもお兄様は快復して退院することができたようでとっても安心した。
それから、お兄様はお父様との稽古に一層励むようになった。依姫も兄上を支えられるように強くなりたいと言っていた。
私はこの2人を支えられるようになりたいな。
それはそうとして、お兄様が輝夜ちゃんとデートに行くことになったらしい。
お兄様本人は幼なじみだし普通って言ってたけど、とっても気になるわ！
「依姫もそう思うわよね！」
「その通りです姉上！不純異性交友は阻止すべきです！」
「それはちょっと違うと思うわ…」

そんなこんなでデート当日。
当然の如く私と依姫はお兄様をつけていた。
「姉上、ほんとに大丈夫なのですか？」
「大丈夫よ。永琳先生が作ったこの光学迷彩なら透明になって身を隠すことができるはずよ」
「あ、姉上！兄上と輝夜が洋服屋さんに入って行きました！これは、試着室が1番の危険ポイントですよ！」
「いやいや、それはないわよ…」
依姫って結構むっつりなのよね…
「なにやら輝夜ちゃんが洋服を選んでるようね」

「大変です！試着室に向かって行ってます！」
いや、別に大変ではないと思うな…
「とにかく行ってみましょう！」
ゆっくりと試着室の方に近づき、顔をひょっこり出して覗いてみると…
水着!?
「大変よ！これは事件よ依姫！」
「これは不純異性交友ですよ！間違いなく！」
「いや…そういうことじゃなくてね。普通、水着姿なんて好きでもない異性に見せることなんて無いでしょ？」
「な…つまり輝夜は兄上のことが好きなのですか!?」
「その考えは早計ね。輝夜ちゃんのことだしまだ分からないわ」
「で、ですよね…」
その後も2人をつけていたがこれといったことも無く終わったようだ。
「兄上が不純異性交友に現を抜かして稽古に身が入らなくなってしまわなくて安心しました…」
「あ、依姫はそれで心配してたのね…」
「はい。勿論です」
あっけらかんと言う依姫に私はちょっとだけ呆れた。
私も単にお兄様の恋路が気になって面白くて来ただけだから、人のことは言えないけどね…
それに、依姫の心配も杞憂に終わったようだし一安心したわ。
「帰りましょ、依姫。」
「分かりました」
「あ、そうそう。この辺に食〇ログで星5の美味しい店があるみたいよ。」
「それは本当ですか！是非寄っていきましょう。」
なんて素直で可愛い妹なんだ。この娘だけはしんでも守りたい。
お兄様？お兄様なら1人でも大丈夫よ。多分。
「今日はお姉ちゃん奢っちゃうわよ～！」

「ご馳走さまでした！」

……財布が随分軽くなってしまった。

第６話

「　　して、身体や物の強化ってどうやればいいんですか？　」
「原理は単純よ。対象に霊力を流し込んで凝固させたり流動的にすることで物のあり方に自分の意志を与えるの。」
「なるほどわからん。」
「とにかくまずは基本から始めるわよ。霊力を用いた身体強化、これがあなたの最初の課題ね。」
　今スルーされたよね。うん。
「分かりやした！」
「それと身体強化について分かりやすく説明するわ。」
　～少女？説明中～
「と、言うわけなのよ。」
「なるほど！やってみます。」
　心臓から全身へ。霊力を血に乗せて流していくイメージ。
　始めてからすぐに体が軽くなったように感じる。
「さすが、綿月家の長男ね。予想以上に筋がいいわ。」
　珍しくえーりん先生が褒めてくれた。素直に嬉しい。
「まじっすか！続けてみます！」
「言っていなかったけど加減を間違えると霊力が臨海して体が爆発するわよ。」
「えええええええくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!!!!!!!!」
「…冗談よ。」
　普通に冗談に聞こえないんだが…てかちょっとニヤニヤしてるじゃねーか!!!!!!!!

　それからの２年間は身体強化の練度を高めていき、なんと体術のみならえーりん先生に勝てるようになった。
　それから取り組んだ物の強化も難なく仕上がり、えーりん先生に習うことはあと能力の制御のみになった。

恋太郎に霊力操作を教えてやって欲しい。
そう頼まれてから今まで恋太郎に技術を教えて来たけど、よくここまで強くなれたものだな、と思う。有り余る武術センスと身体能力、無尽蔵、とまでは行かないが申し分のない霊力。これらを併せ持つ恋太郎だが、彼には成長を妨げる要素が多すぎた。特異体質による霊力行使の制限、能力の実質使用不能。にもかかわらず、ここまでここまで強くなったものだと思う。
私は少し心配だ。この都市の住人として永く生きた中で力ある者達が潰れていく様を幾度も見てきていたからだ。
恋太郎なら心配無用なのかもしれない。彼のまっすぐさは少し危なげだが、一旦立ち止まって冷静に考える賢さも持ち合わせているのも確かだ。
それに、彼がいなくなれば姫は悲しむだろうし、幼少期からずっと面倒を見ている恋太郎には誤魔化せない程の情が移っている。
などと考えながら、これまた彼の父に依頼されていた刀を取り出し彼に手渡した。
私の現行の技術の粋を結集して製作された刀。性能や機能的に相手を滅する為、というより人を守る為の刀と言えるだろう。
恋太郎には守りたい人がいるようだし、彼の戦闘スタイルにも合うだろう。

ところ変わってここはえーりん先生の研究室。
どうやら能力の制御に関しては修行、というよりは授業のようなものらしい。
「それじゃあ、えーりん先生の授業を始めるわよ？」
「先生、キャラ崩壊してますよ」
「……」
「…こほん。それじゃあ能力の制御について解説するわ。」

「まず、あなたの体内に特別な器官のような物があると思って頂戴。」
「いえっさー」
「実際にはそんなもの存在はしないのだけどね。それでもって、その器官に燃料となる命が流れることで燃焼反応が起き莫大な霊力が生成されるわ。」
「この一連の流れ、一見制御は無理そうに見えるわ。そこであなたに渡したその刀が役に立つの。それがかくかくしかじかな方法で器官にエネルギーが流れ込むのを制御している、というわけね。」
「かくかくしかじかな方法ですか…」
「ええ。あなたの能力は主に感情で左右されているから細かく制御するには外部部品が必要ってわけ。」
「なるほど。確かに感情を全てコントロールできるようならそれは人に非ず、ってもんですよね。」
　先程受け取った刀を持ち、全体を軽く観察した。外面は特に変わった点が無い。強いて言えば俺の体質の攻撃範囲を限界まで使うために刀身が長くなっているくらいか。
「気になるかしら?急がなくても刀は逃げないわ。使い方は普通の刀と変わらないわ。能力の制御については柄の下部に付いているダイヤルを使って調整すればいいわ。尤も、その能力を使いすぎたら死ぬのは目に見えてるのだけどね。」
　怖いよ、先生、怖いよ…
「ここからはもう私が教えられることは無いわ。この3年間、よく頑張ったわね。」
「ありがとうございます…先生。ここからは俺の独力で頑張ります。」
　そう言うと、先生は俺を笑顔で見送ってくれた。

　それから数ヶ月後、俺は月の防衛軍の入隊試験の合格通知が家に届き遂に明日から入隊することができるという緊張感からあまり落ち着くことができていなかった。
「ん?」

急に携帯のバイブ機能が作動した。どうやら輝夜からのメールのようだ。端的に言えば待ってるから外に出て来いとのことだった。素直に指示に従って外に出ると、そこには2、3年経って小さくなった輝夜がいた。
「恋太郎、身長伸びたわね。」
「輝夜が縮んだんじゃないのか？」
「失礼ね!!私だって少しは背が高くなってるんはずよ！」
どうやら身長は伸びても可愛さは変わらないらしい。
「…で、用ってのはなんなんだ？」
「別に…そんな大それたことじゃないわよ。ちょっと中腰になりなさい。」
どうして中腰？
「あぁ分かった……って、なっ、なっな」
突然のキスにお互い頬が真っ赤に染め上がる。唇が離れると同時に目を逸らして頬に手を当てる輝夜を直視することがいつもの3倍難しい。
「う、うっさいわね！ほっぺにキスしたくらいで騒ぐんじゃないわよ。」
と言いつつも顔は真っ赤になっている輝夜。かわいい。
「これは餞別よ、恋太郎。心配かけるんじゃないわよ。」
「そうだな…ここまでしてくれたなら一生くたばる訳にはいかないな。」
「その意気よ。私だって勉強していつかあなたに追いつくんだからね。」
「望むところだ。輝夜ならすぐできるさ。」

それから2人で夜が更けるまで思い出話に花を咲かせ、解散した。
いよいよ明日だ。明日から俺はこの都を守る兵になる。もっと力を付けて輝夜を、みんなを守るんだ。そう胸に刻み込み、騒ぐ心臓を必死に宥めて就寝した。